

タスク・シフトとして検査技師が初めて参画した腹腔鏡内視鏡合同手術（LECS）

◎川井 孝太¹⁾、奥村 涯¹⁾、池田 美紀¹⁾、久米 彩也香¹⁾、榛葉 由佳¹⁾、幡野 すみれ¹⁾、上村 のり子¹⁾、清水 憲雄¹⁾
磐田市立総合病院 医療技術部 臨床検査技術科¹⁾

【はじめに】

近年、医療法改正により、臨床検査技師業務範囲が拡大され、多くの施設でタスク・シフトが進んでいる。当院（病床数:500,市立基幹病院）臨床検査技術科では2012年より、臨床検査技師が内視鏡業務に携わっている。今回、内視鏡業務の一環として腹腔鏡内視鏡合同手術（以下、LECS）に参加したため報告する。

【症例】

83歳、女性。現病歴：盲腸ポリープのフォローのため、他院で下部内視鏡検査が施行された。その結果、虫垂にIIa様病変を指摘。当院消化器内科へ紹介受診となりLECSが実施された。

【業務内容】

内視鏡業務では、上部・下部内視鏡検査時の鉗子操作、患者対応、スコープ洗浄等を行う。内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）では局注業務、鉗子操作、高周波ナイフ操作などに携わっている。今回のLECSでは①放射線科・手術室看護師,医師と連携しスケジュールの確認。②内視

鏡室の光源など必要物品を手術室への搬送と設置。③局注操作。④高周波ナイフの操作等を行った。

【まとめ】

近年では、タスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会に臨床検査技師が受講し、多くの施設でタスク・シフト/シェアが進められている。内視鏡業務は多職種で連携するチーム医療である。今回、臨床検査技師として手術室で行われる腹腔鏡内視鏡合同手術（LECS）に参加した。

【考察】

今後、多くの技師が検査室外の業務に携わっていく環境になってくる。内視鏡業務には患者が検査中に急変する状況や侵襲のある検査の介助もある。タスク・シフトを進めていく上で、業務内容の理解、患者侵襲性の理解、多職種連携チーム医療としてのコミュニケーションが重要になってくると強く感じた。

磐田市立総合病院 0538-38-5000（内線:2703）